立教英国学院通信

第二百五十六号　二〇一〇年十二月六日
発行者　立教英国学院
RIKKYO SCHOOL IN ENGLAND
GUILDFORD ROAD, RUDGWICK　RH12 3BE
http://www.rikkyo.co.uk

オープンデイ

十一月七日（日）、オープンデイ（文化祭）が開催されました。今年のスローガンは『ＲＥＶＯＬＵＴＩＯＮ』。数年ぶりに恵まれた晴天の下、オープンデイに革命を起こそう！と生徒たちが全力で臨みました。

今年のクラス展示は、小六・中一は『アニメ・漫画』、中二は姫路城の模型を中心とした『日本の城』、中三は『妖怪』、高一は宇宙探検のできる『宇宙の旅』、高二―一は『西遊記』、高二―二は『古代』をテーマに生命の進化を追っていきました。高三の模擬店も大盛況。さわやかな青空も手伝ってか、日本人・英国人合わせて五百名近いお客様が来て下さいました。ご協力下さった保護者の皆様、本当にありがとうございました。

寮内にコモンルーム

2学期から寮内にソファや TV が運び込まれ、コモンルームが設置されました。コモンルームとは、生徒たちが自由に訪れておしゃべりをしたり、ちょっとした遊びを楽しんだりできるスペースのこと。放課後には、男子寮ではカードゲームやダンス、女子寮では DVD 鑑賞やおしゃべりなどでにぎわっています。わいわい集まれる場所ができたことで、寮生活がますます楽しくなりました。

最後になって気づいたこと

高三　福間　絢子

十一月七日。高校生活最後となるＯＰＥＮ ＤＡＹ当日を迎えた。気温は低かったが無事に晴れ、すがすがしい一日となった。高三は毎年クラス企画に参加しない代わりに父母の会の模擬店に参加することとなっている。私はチケット係を担当することになっていた。

チケット係は焼き鳥係や食堂係と違い、生徒と接する機会よりも外から来たお客様と接する機会の方が多い。お客様が食券を求めて一番最初に訪れる所がチケット売場という事もあり、チケット販売開始の前はとても緊張していた。

しかし、当日までの準備をする間を通して、私はＯＰＥＮ ＤＡＹの本当の意味を理解したような気がした。チケット係の作業を行う際、指示はすべて役員のお母様方が出されていた。どのようにすれば子供達が喜ぶか、どのようにしたら当日スムーズに販売・接客をしていくことができるのか。父母の会のお母様方は常にその事を考えて行動してくださっていた。

高一、高二と会計本部として働いていた私は、今まで本部員としてＯＰＥＮ ＤＡＹを成り立たせているという気持ちでいたが、今回ＯＰＥＮ ＤＡＹを行って、成り立たせているのは生徒だけでなく、父母の会の協力もあるからなのだという事を知った。高三は当日の開会式で「高三と言えば縁の下の力持ち!!」と気合入れをしたけれども、本当の力持ちは父母の会の方たちだと私は思う。

当日チケットは終了予定よりも一時間前にほぼ完売となり、チケットがなくなり苦情が来るほどの売れ行きだったが、最後まで楽しんでお客様と応対することができ、販売終了後に自分が誘導したお客様とすれ違うとみんな顔見知りに思え、少し誇らしい気分になった。

高三最後のＯＰＥＮ ＤＡＹは今までとは違う新鮮なものが感じられた。父母の会の皆さん、来てくれたお客様、素敵なクラス企画で頑張ってくれた後輩達にありがとうと言いたい。

【２学期の行事】

9 月 11 日	生徒帰寮	10 月 17 日	バスケットボール部ロンドンで合同練習に参加
9 月 12 日	始業礼拝	10 月 20 日	アウティング
9 月 13 日	高等部実力テスト	10 月 29～11 月 6 日	オープンデイ準備期間
9 月 17 日	茶道部、大英博物館の茶道講演会へ外出	11 月 7 日	オープンデイ
9 月 18 日	JAPAN 祭りへ外出・ボランティア参加	11 月 11～12 日	ワージング音楽祭
9 月 23 日	午後ブレイク	11 月 14 日	ウェスト・サセックス・ギター音楽祭
9 月 25 日	ロンドン日本人学校の文化祭へ外出	11 月 19・27 日	ケンブリッジ英語検定の実施
9 月 26 日	生徒会主催ギルフォード・ショッピング	11 月 24～29 日	期末考査
10 月 2 日	生徒会主催全校レクリエーション	12 月 2 日	スクールコンサート
10 月 3 日	ギターコンサート	12 月 3 日	クリスマスコンサート、キャロリング、クリスマス礼拝
10 月 9 日	ウォルディンガム・スクールへ外出	12 月 4 日	終業礼拝、生徒帰宅
10 月 10 日	第 30 回 因数分解コンクール	12 月 10～11 日	高等部入学試験

－目次－

	ページ	＊コラム＊	
オープンデイ	1～3	寮内にコモンルーム	1
アウティング	4	MRS.SIXSMITH のアート・エキシビション	2
短期留学	4	卒業生母校訪問	2
各教科レポート	5	保護者の方より	3
ケンブリッジ・サイエンスワークショップ	6～7	JAPAN 祭り	4
第３回　チャプレンより	8		

OPEN DAY

高二―一　澤本　篤志

今年のオープンデイと昨年のオープンデイでは大きな違いがあった。生徒会の仕事をしつつ学級委員としてクラス企画をまとめていく事、つまり生徒会と学級委員の両立だ。これは決して簡単なことではなかった。オープンデイ期間が始まる前から生徒会の多くの仕事をこなし、且つクラスの申請物の確認などの学級委員としての仕事もこなさなければならない。準備期間中はクラスメートが各自フリープロジェクトに行っている間、生徒会のみでオープンデイ作業、正直こんなに忙しくつらい時間は今後多くないと思う。でも逆に言えば、こんなに充実して真剣になる時間もそんなに多くはないんだろうと思った。なかなか企画が進まなく、何度か喧嘩しかけたこともあった。でもその中で協力し合い、勝ち取った総合優勝は本当にうれしかった。そして今年のオープンデイで生徒会として活動した事で気付いたことがある。それは今まで普通にオープンデイ作業していては気付くことができなかった、係・本部また先生方の協力、努力があって初めてオープンデイという行事が成り立っているということだ。今まで体育館にビニールシートが貼ってあることなど気にしたこともなかったが、自分も本部として体育館設営を行うことで初めて、その大変さや、ありがたさを実感することができた。

今年のオープンデイを通して、昨年よりは少しは成長したのかもしれないと感じつつ、今後忘れることのない最高の思い出になった。

MRS.SIXSMITH のアート・エキシビション

本校で 20 年に渡って美術を教えてこられた Mrs Sixsmith が一昨年他界されました。ご家族の希望により、オープンデイの Rikkyo Exhibition のコーナーでその作品展示を行うことになりました。

Mrs Sixsmith は芸術大学を卒業後、服飾デザイナーとして活躍していらしゃいましたが、美術教員として本校で教鞭を執りながらも数々の作品を創作されました。その作品は、服飾をはじめ、陶磁器や絵画、彫刻、染め物やスクリーンプリンティングなど多岐に渡ります。今回はその中から選りすぐりの代表作が展示されました。

作品の脇に飾られていたご本人の顔写真を見ながら、「こんな作品も作っていたんだ。」と授業を受けた生徒達は感慨深げでした。快晴に恵まれた今年のオープンデイ、Mrs Sixsmith を偲ぶこの展示会には地元の英国人の方々もたくさん訪れて下さいました。

正直こんなに忙しくつらい時間は今後多くないと思う。
でも逆に言えば、こんなに充実して真剣になる時間もそんなに多くはないんだろうと思った。

オープンデイ

高二―二　加藤　愛

今年のオープンデイ「楽しかったー。」「いい思い出になった。」そんな単純な言葉で終わらせられるような甘いものではなかった。

私はダブルダッチの長になった。長を任せてもらえたのは嬉しかったが、自分は去年からダブルダッチを始めた様なレベルで、何をやれば良いのかわからなかった。最初は皆、部活が忙しくて練習に全員参加するのだって多くはなかった。とりあえず自分に出来る事は全部やろうと思った。暇があればほとんどダブルダッチについて考え悩んでいた。しかし、いくら本を読んでもろくにアドバイスも出来ない自分が情けなかった。時々出てくるメンバーの愚痴に深く傷ついた事も多々あった。だけどメンバーの皆でふざけ合っている時は本当に楽しかった。皆で優勝に向かって一生懸命頑張った。

そして当日、その夜の後夜祭。出来は最高だった。技もほとんど成功した。一つ一つ技が成功していくごとに熱い何かがこみ上げてくるのを感じた。さらに最後の決めポーズ。本当にスカッとした。全部を出し切ったと思った。メンバーの七人全員が心を一つにしたのを感じた。あの感じはこれから絶対に忘れる事はないだろう。高三の先輩方中心に皆盛り上げてくれて本当に嬉しかった。

そして結果発表。なんと優勝でした。ずっと念願だった優勝を手に入れる事ができた。表彰式が終わった後にダブルダッチの先生や去年ダブルダッチの長だった先輩に「おめでとう」と言ってもらえて涙が出てくるほど嬉しかった。

今回たくさんつらい事もあったがその分最高の終わり方ができて本当に良かった。私はこのメンバー六人が大好きで本当に一緒にやってこれて良かったと心から思う。今まで支えてくれたたくさんの人達にお礼が言いたい。また、一緒にやってきたこのメンバーを私はこれからもずっと大切にしていきたい。

最高の思い出になった。

卒業生母校訪問

立教も創立以来38年が経ち、勤務先がロンドンであったり、ご家族の転勤で渡欧されたり、旅行で訪英する機会を捉えて、しばしば卒業生が母校をおとずれて下さいます。今学期はオープンデイ当日を含めて、多くの卒業生が顔を見せてくれました。皆さんご夫婦や子供連れで来てくださり、なかなかにぎやかでした。ホームページの卒業生訪問コーナーも是非ご覧ください。

OPEN DAY

小六　玉井　大智

先週のオープンデイ期間は辛かったです。最初のころは授業がないからいいと思っていましたが、途中から授業の方がましだと思うようになってしまいました。

僕は一枚の大きな紙をポケモンで埋め尽くさなくてはいけなかったにも関わらず、あと三日という時にまだ半分も終わっていませんでした。最終日になってもうだめだと思っていると、高三が手伝ってくれ、最後にはすべて描ききれました。

そしてオープンデイ当日、他の学年の作品を見ました。特に中三から高二までは教室だったということさえもわからないほどすごかったです。その中でも高二―一は西遊記についてやっていて、看板から何もかもすごかったです。中二の姫路城もビックリするほど出来が良かったです。

これらの作品を見ると情けなくなってきました。でも、小六、中一も頑張れたと思います。来年はもっといいものを作りたいです。

高一が作りだした宇宙

高一　福谷　なつみ

"The space Odyssey !"

チャペルの中で響く高一の声。その声は一週間の作業を終えた後の疲労感は全くなく、達成感に満ちていた。

高一の企画は宇宙という抽象的なテーマで、何のトピックスをやるかの話し合いはかなりの時間を費やしたと思う。その反面作業をし出すと止まらなかった。エイリアン制作がその例だ。広いテーマはまとめづらいが、発想が出やすく今の高一に合っていた気がする。作業は惑星ごとに人を分けて行っていたが、どのチームも個性が出ていた。宇宙探検のわくわくするストーリーにそって作られていった模型、背景はどれも工夫が施されている。ただ赤く塗るだけではなく、場所によって黒を入れた赤で塗っていた太陽。入った瞬間きれいなビーナスがお出迎えする金星。一見地球儀に見えるがよくみると陸地が反対になっているα星の模型。背景を使って星座の紹介を描いた火星。惑星の中がどうなっているかを見せた木星。どれもこれも何を伝えたいかが分かっておもしろい。

私は学級委員として、チームの作業をちょくちょく見ていた。案が決まらなかったり、意見が合わなかったりと最初はバラバラな星達だったが、後半は一つの惑星と化していた。

目まぐるしく過ごしたハーフタームはたとえるならば、銀河だ。銀河はたくさんの星が集まっていて、天の河のように地球にいる私たちにその美しい姿を見せている。

高一という星二十七人が集まって見事クラス企画を完成させ、いらっしゃったお客様に感銘を与えた個性あふれる銀河。来年のこのクラスの企画がどうなるのか、かなり楽しみである。

高一の皆さん、お疲れ様。そしてありがとう。

目まぐるしく過ごしたハーフタームは
たとえるならば、銀河だ。

ー保護者の方よりー

今年から後夜祭へ保護者の方も参加していただけるようになりました。後夜祭では、展示会場やフリープロジェクトの発表をゆっくりご覧いただけます。感想を頂戴しましたのでご紹介します。

春より、オープンデーの準備他に関し、多大なご理解とご協力を賜り、本当にありがとうございました。お陰様で、天候にも恵まれ、無事、終えることが出来ました。

前日、学院に伺い、初めてオープンデーの準備をする子供たちの姿を眼にしました。皆、一週間の疲れを顔に見せながらも、廊下で巨大な模造紙に色を塗る者、教室の壁、天井に至るまで、色んな飾りを付ける者。皆、時間が迫る中で、一生懸命に、自分たちの「発表」を作り上げている姿が眩しく感じられ、頑張れ！と、エールを送りたくなりました。また、誰かとすれ違うたびに、皆「こんにちは」と、気持ちよく挨拶してくれました。

高3生と前日準備をする中で、役員から出てきた事は、高3生が、本当に素晴らしいという事でした。礼儀正しい、自分たちで判断してより良くしようと工夫してくれ、自ら進んで動いてくれる。本当に頼もしいです。焼き鳥担当の役員も、「もう私は見守っているだけ。H3生の皆さんにお任せするのが一番」と、言っていました。他のブースの役員達からも、皆、同様の話がありました。

役員の中には、高2生の保護者が多いので、「うちの息子・娘も、来年、こんな風になれるのだろうか？」と、心配する声が上がりました。

そして私たちの結論は、「多分、赤ネクタイを締めた時に、最高学年の自覚が現れるのだろう。」という事で、収まりました。実際に、今年度、後夜祭の見学をご了承いただき、参加させていただく中で、上級生が、下級生を、「もっとこっちにおいで、観やすいよ」と呼び入れてあげる姿が多々観られ、本当に感心しました。上級生が下級生を引っ張り、創り上げ、また、毎年、それが受け継がれていっているんだろうな。という事が、よく判りました。また、そんな中で、今年オープンデイを率いていた高2生も、事ある毎に高3生を引き入れ、12月には学院を去ってしまう先輩方に、最後のオープンデイを楽しんでいただこう！という気持ちが、よく解りました。

今回、私達の後夜祭見学をご了承くださり、本当にありがとうございました。今回は、初回という事もあり、子供たちの反応も心配で、手伝って下さった保護者のみへの告知とさせていただきましたが、後夜祭は、全ての生徒が一堂に会して行われるので、子供たちの、先輩を思う気持ち、後輩を思う気持ちが、ひしひしと感じられて、本当によかったです。

そして、父母の会役員は、高2生の保護者が多いので、我が子が中心になって盛り上げているオープンデイの様子を、観る機会を与えていただいたという事は、何事にも代えがたい、ご褒美になりました。本当にありがとうございました。

私達役員の感想ばかり書いてしまいましたが、お手伝いの皆さんにも、帰り際には「楽しかったです。本当にありがとうございました。」というお言葉を多数いただきました。中でも、「高3生と一緒にお仕事が出来て、楽しかったです。」という感想が多かった事を、ご報告申し上げます。

アウティング

今年も恒例の秋のアウティング（遠足）に行ってきました。冬将軍の到来を感じさせる冷え込みでしたが、さわやかな秋晴れの一日となり、澄んだ空気と紅葉と英国らしい雰囲気の街を楽しむことができました。

高１キングス・カレッジの前にて

ケンブリッジに行って

高一　山本　優子

私は十月の二十日にケンブリッジへアウティングに行った。

ケンブリッジでは、ショッピングなどを楽しみつつ、英人ガイドさんが案内して下さったツアーを通じて町の名物に関するエピソードなどについて学んだ。数学橋やニュートンのリンゴの木、銅像となっている様々な偉人達について…。なかでもガイドさんに聞いて衝撃を受けたことは、アップルコンピューターの有名なロゴとなっているリンゴが、実は毒リンゴである、ということだ。

私は英語が得意な方ではないので、ガイドさんのして下さる説明を理解するのは至難の業だったが、クラスメイトが質問をしている時に少し参加させてもらったりして英語に触れ、ツアーの時間を楽しむことができた。

ツアーの他にも、ホットドッグスタンドでお昼を食べたり、ショッピングモールで必要な物、欲しい物を買ったりと楽しい時を過ごした。その間も、自分の食べたい物を注文してお金を払ったり、店員さんがくれた割引カードの使い方がよく分からなかったので質問したりして英語に触れることができていたので、ただ遊んで楽しんだだけでなく、有意義な時間を過ごすことができたと思う。

その後、帰りのバスに乗車するまでのほとんどの時間は、夕食をできるだけ安く済まそうということで入ったマクドナルドで過ごした。そこで一日を振り返ってみたり、その他色々なことをクラスメイト達と話し、新入生でまだあまり話ができていなかった私は、少しだけまたクラスに溶け込めたような気がしてとても嬉しかった。

次の日にあったＥＣの授業では、ケンブリッジについて学んだこと、ケンブリッジで遊んだことなどについて先生からの質問に答えたり、先生からもまた別の知識を教えてもらったりした。

今回私はケンブリッジへアウティングに行って、とても良い経験をすることができたと思う。初め、「英語を結構使う。」と聞き、尻込みしてしまっていた私だったが、他のクラスメイトに手伝ってもらったりしながら、いつも以上に沢山の英語に触れることができた。また、そういったことなどを通して、クラスメイトと話す機会も増えた。

三学期には、ロンドンへアウティングに行く行事があるらしい。今回の経験を生かして、次はもっと積極的に英語を使ってみようと思う。

小６～中３はポーツマスへ

短期留学

今年度、英国のWolverhampton校へ本校から短期留学するというプロジェクトが発足しました。来年創立百周年を迎えるという伝統あるWolverhampton校。七月十一日（日）から五泊六日、日本語を習っている生徒の家庭にホームステイをしながら授業や課外活動などに参加しました。校内十名近くの応募者の中から選抜された高二女生徒三名が短期留学を終えて戻ってきたとき、教員室に入るなり「楽しかった～！」「先生、聞いて下さいよ！」「これ見て下さい！」「あ～、あともう一週間いたかった！」などなど嵐のように体験談が続きました。「夏休み中に遊ぶんです！連絡先も交換しました！」と、短期留学は有意義なものとなりました。

Wolverhampton 校の校舎にて

短期留学に行って

高二―二　山本　美祈子

五日間ほど短期留学をして、私は日本語を学んでくれている子達と触れ合って、自分の国の言葉を学んでくれるという事がどんなに嬉しい事か、知る事ができました。私たちが苦労しながら学び、そして苦労しながら、でも一生懸命に話す英語を相手が理解してくれるのと同じように、彼女たちが一生懸命になって日本語を学んでくれているのがよく伝わってきて、本当に嬉しかったし、短期留学に行ってよかった、そう思う事ができました。

言葉を話せるという事は大切です。でもそれ以上に、自分たちの言葉を話そうという意欲、学ぼうという意欲が大切だという事に今回の留学で気付く事ができました。

毎日、立教生三人が一緒でいられるようにしてくれた、ステイ先の子の気遣いが身にしみました。せめてあと一週間いられれば、もっともっと仲良くなれた。やっと仲良くなれたのに…。こんな感情が持てた、それくらい楽しく、充実した留学でした。

JAPAN 祭り

9 月 18 日土曜日、立教生は、ロンドンのスパイタルフィールドマーケットで行われた JAPAN 祭りに出掛けました。スパイタルフィールドマーケットは歴史を 13 世紀にまでさかのぼるロンドンの商業の中心地。到着後、会場はすでに大入り満員で、班行動を維持するのもやっとのほどです。尺八や太鼓、浴衣や武道の伝統文化、アニメのモダンカルチャーなどなど。

折り紙と書道のボランティアに立候補した 20 名の生徒たちは、新聞で兜を折り、子供達にかぶせてあげたり、名前をカタカナで半紙に書いてあげたり、自分の持ち時間をフルに活かして来場したお客様をもてなしました。

『生きた英語を学ぶ』　ＥＣ講座

「使える英語」の習得を目指して大改革が進むネイティブスピーカーによるＥＣの授業―今学期は生徒たちを近くの村に連れ出して、道行く人たちに突撃インタビューをしました。ＥＣの主任、ローズ先生によるレポートを頂きました。

This term all students from P6 to H2 had the opportunity to visit Cranleigh. Cranleigh is England's largest village with many shops and facilities and is about 15 minutes from Rikkyo. It gave the pupils the chance to put their English into action and to speak to residents and shoppers in the village.

All students worked with a partner and they all had different tasks to do in the hour they spent in the village. They all needed to ask a passer-by for directions to a particular location and once there find out a piece of information. This involved looking for e.g signs, timetables or price lists and then noting down the answer. They also carried out a mini survey and asked passers-by about their reason for their trip to Cranleigh and how they travelled there that day.

All of the English teachers have learned a foreign language and we are all aware of the amount of confidence needed to speak to a native speaker, especially when you're just beginning. Because of this we were very impressed with the students, considering it was the first time they had done such tasks. We very much hope the short time they spent that morning goes a long way towards inspiring them that they are successful English speakers, and they can only get even better.

E.C. Head　Ms Rose

クランレーの町で道行く人に突撃インタビュー

各教科レポート

『トランク探偵』　情報講座

高二の情報講座の一つで、新しい試みが始まりました。名づけて『トランク探偵』。三年前、女子寮となっている建物の屋根裏から発見された一個のトランクがありました。女子寮は1900年ごろ、領主館だったことは既に知られていました。その頃のものと思われる品を調査研究し、事実や風俗などを探る授業が始まりました。

授業活動は一週間に一回ですので、今学期のテーマはトランクの中身の整理。集まった探偵メンバーは六名。埃っぽい品々にむせながらリストアップ。一つ一つを丁寧にデジタルカメラで撮影し、データベース化しました。整理しながら探偵達は様々な推測を展開。

「トランクの持ち主は女性である」「手紙の英文が非常にきれい。教養がある。」「肌着類は多いが、衣服がほとんどない。制服を着るメイドだろうか。」「肌着・エプロンに必ずイニシャルがある。しっかりした人だ。」「犬のモチーフが多いから犬好きかな。」「トランクに刻まれた『J．E．B．』は名前ではないか。」などなど。手紙の日付から、時期は1916～1920年と特定されました。第一次世界大戦の頃です。一体この人物は誰で、どのような生活を送った人なのでしょうか。

11月に行った手紙・ハガキ・写真の調査では、手紙はハロルドという名の従兄（弟？）夫妻から送られたものと分かりました。夫妻は生活に不安があり、大戦後の住まいに悩んでいました。写真も一枚同封していました。もともと写真を送る約束があり、他にまた写真を送ることになっていました。手紙には宛名も住所もないのですが、別に写真がたくさん発見されましたので、これらがあとから送られたものかもしれません。逆にハガキには差出人の名はなく、宛名と住所がありました。

『Dear Jessica』　『To Miss J Burrell』

トランクには『J．E．B．』の印字

肌着・エプロン類に『J．E．Burrell』

持ち主の氏名は、ジェシカ・E・バレル嬢と判明しました（Birrell、Burrleの可能性も）。

次にハガキの住所も生かし、人物の特定に着手。英国に戸籍はありませんが、納税者であれば行政機関に記録があります。しかしバレル嬢が納税者である確証はありませんので、国勢調査の記録をあたりました。英国では1801年に国勢調査が始まり、それは10年ごとに行われます。1911年までの記録はインターネット上で公開されており、この年は手紙の年にも近く、氏名・生年月日・出生地・職業などにわたるデータが揃っていました。しかし、一致する記録は発見することはできていません。

現在の謎は「バレル嬢のトランクがなぜここにあるのか」です。ハガキの宛先はロンドンと思われる住所で、C/O の記載があります。身を寄せていたか、働いていた場所か。その彼女の荷物が、ロンドンから離れた片田舎の館になぜあるのか。1920年より後、この領主館で働いたのか、それとも客人だったのか、それとも？この謎を解明するためにも、更なる調査が必要です。

今後の主な課題は

◆領主館時代の資料を集める

◆教区を頼りに、教会の記録を調査

◆たくさんの衣類を詳しくしらべ、当時の風俗をさぐる

です。探偵メンバーは三学期も参加することを強く希望しています。今後の展開が期待されます。

今までの調査活動の詳しい様子はホームページで公開しておりますので、ぜひご覧下さい。

ケンブリッジ サイエンス ワークショップ

二〇一〇年八月一日より、英国ケンブリッジ大学を会場として、日英高校生を対象にした科学ワークショップが開催された。二〇〇一年に初めて英国ブリストルで行われたサイエンスワークショップ、二〇〇三年の立教英国学院でのパイロットプロジェクト、そして二〇〇四年より京都で始まった日英隔年開催のワークショップは今年十年目の節目を迎え、科学研究の世界の最高峰であるケンブリッジ大学で開催する運びとなった。本校は二〇〇一年より企画運営に参加しており、今年で第7回を迎える。今年は直接ケンブリッジ大学の科学研究者より指導を受け、英国人高校生と共に最先端の科学を探求、実験、調査、討論、発表することを特に目指した。ケンブリッジ大学、マリーエドワードカレッジに英国人高校生と共に宿泊し、科学を学ぶだけでなくお互いの文化を学びあう、国際理解、文化交流も目的の一つである。

日本からの、文部科学省によって指定されたスーパーサイエンススクール5校の生徒・教員27名に加え、本校からは5名の生徒が参加した。英国側6校の学校からは同世代の高校生22名が参加した。ワークショップに先立って、日本側参加者を対象に、プレワークショップ（ロンドン研修）を企画した。立教英国学院を起点としてロンドンに外出し、近代科学の原点であるロイヤル・ソサエティ（王立協会）をはじめとする諸学術学会、王立研究所、自然史博物館、大英博物館を訪問し、科学の本物に出会うことができるような研修を行った。

マリーエドワードカレッジ
嘉悦ケンブリッジ教育文化センターにて

多感な高校生のこの時期にワークショップに参加する経験は、今後の高校生活にあたり、将来展望、学習の動機、進路、進学の面でも大きな影響を与えたものと考えている。本校教員代表として参加した岡野はその企画運営、小林はワークショップの記録の面で、ケンブリッジで行なわれた初めてのワークショップの運営に協力した。

プロジェクトテーマ

今回のプロジェクトテーマは、化学、物理、生態学、生命科学の4つの領域に分かれている。いずれのプロジェクトでもケンブリッジ大学で活躍する先端研究者の指導をお願いした。それぞれのプロジェクト中で指導される先生方に、高度な研究、機器に触れるだけでなく、先生方が行っている実験の意味、役割、社会との繋がりを、実験を、また先生方の研究姿勢を通して高校生が学ぶことができるように特にお願いをした。

本校の5名の生徒達、高二 岩渕将之（脳の認知）、高二 湯浅慧大（将来の電子機器）、高一 福谷なつみ（神経細胞の退化）、高一 北端ふみ（南アメリカの蝶の生態）、高一 地曳恵太（テントウムシとその寄生）はそれぞれのプロジェクトに参加し、GCSEで鍛えた英語力を駆使してケンブリッジでの初めてのワークショップの成功に大いに貢献した。

化学分野

化学分野では、ケンブリッジ大学化学学部シャーマン博士の指導によりナノ粒子の化学的合成の実験を行い、化学分野におけるナノテクノロジーの先端研究とその限界を体験することができた。同時にこのプロジェクトでは指導してくださる研究者と高校生の間で活発な質問が交わされ、シャーマン先生はその質問の質の高さに驚いていたことが印象的であった。シャーマン博士は今回のプロジェクトの指導研究者として真っ先に名乗りをあげていただいた先生であり、若い高校生の時にこそ、先端研究者との交わりの経験をすべきであり、科学への情熱をもつ若者が増えれば未来への財産になるとの考えを持っておられる。今後もケンブリッジでのワークショップでの中心指導者として活躍して頂けることを期待している。

ベイブラハム生命科学研究所にて

物理分野

物理分野はケンブリッジ大学物理学部、キャベンディッシュ研究所、日立ケンブリッジ研究所の協力で行なわれた。ケンブリッジ大学が輩出した85名のノーベル賞受賞者のうち、この研究所研究者だけで29名を占めている。マックスウェル、ラザフォード、トムソンなどの物理学者、遺伝子構造の決定をしたワトソン、クリックらがこの研究所で実験をしたことを考えると、科学研究を目指すものにとっては身震いする思いがあり、理系の高校生にとっては夢のようなできごとである。このプロジェクトでは将来の電子機器へのナノテクノロジーの応用をテーマに日英の9名の生徒達が極小のナノの世界に挑戦をした。浮遊のゴミが全くないクリーンルームでの電子機器の中心部分である基盤回路の製作は、先端の科学技術に触れるだけでなく、大学とは異なる企業レベルでの研究の意味、更に日本を代表する企業がケンブリッジで研究所を持つ意義について、国際的チームワークの重要性について体験することができたと思う。

生態学

ケンブリッジ大学生態学部で行なわれたプロジェクトは、レン博士、マルガリータ博士の指導により、マディングリーにある新装新たな生態学部の建物で日英18名の高校生が3つの班に分かれて行われた。『テントウムシとその寄生』、『蛾の生態とその寄生』、『南アメリカの蝶の生態』についてである。他プロジェクトが研究室の中で行われたのに対して、フィールドワークが主体となり、テントウムシ、蛾を追い求めて生徒達は網を片手に採集に努めた。最初は蜘蛛、蛾といった昆虫に叫び声をあげていた女子生徒もレン博士の何と美しい昆虫達だろうの声に、昆虫達の持つ不思議さ、美しさを感じることができたのではないかと思う。テントウムシは在来の七星テントウムシに加え、外来のテントウムシが発見され、その旺盛な食欲により在来種のテントウムシの減少、またテントウムシに寄生する寄生虫のメカニズムも調査した。蛾のチームは英国を代表するホースチェスナット（栃の木）に寄生する蛾の調査を行い、ここでも、テントウムシ同様、自然界が持つバランスのとれたメカニズムの不思議さを感じ取ったと思われる。南アメリカ蝶の生態については、熱心に南アメリカで森林の保護を訴えているマルガリータ博士の指導で、蝶は学習するかの

参加高等学校

京都教育大学附属高等学校
京都府立洛北高等学校
京都府立桃山高等学校
立命館守山高等学校
横浜市立サイエンスフロンティア高等学校
立教英国学院高等部
Camborne Science and Community College
Colchester County High School for Girls
County Upper School, Bury St Edmunds
Dartford Grammar School
Hinchley Wood School, Esher
Watford Grammar School for Girls

研究を行った。高湿度、スコールさえ降る季候コントロール室で、汗をかきながら、そしてスコールに濡れながらも、異なる色に集まる蝶の生態調査を行った。ハイテクノロジーの技術ばかりが最新の先端研究ではなく、このような地道な作業が地球環境を守っていく一つの道であることを体験したに違いない。

日立ケンブリッジ研究所クリーンルーム

生命科学

生命科学のプロジェクトはケンブリッジ郊外にあるベイブラハム研究所で行なわれ、日英16名の高校生が、生物情報科学、脳の認知、神経細胞の退化、細胞間の信号に関する探求実験を行った。これらのテーマは学校では学ぶことのできない難しいテーマであったが、人間が抱える老化の問題、アルツハイマー病、画像認識に関する第一線の研究者による興味あるテーマに高校生が挑戦した。この研究所では生命倫理に関する討論も活発に行なわれ、実験面だけでなく、研究者が抱える倫理面での問題に、慣れない英語を駆使しながらも何とか自分達の考えを伝える日本の高校生達の姿が印象に残った。

プレゼンテーション

ワークショップの最終日には、生徒達のこの一週間のワークショップの成果を発表する研究発表会が嘉悦ケンブリッジ教育文化センターで行われた。日英の高校生、引率の先生方、指導して頂いた研究者の方々、併せて一〇〇名ほどの出席があり、それぞれのプロジェクトグループからの発表があった。実験の成果だけでなく、ワークショップの経験を通して得られた体験も生徒から語られ、国際交流として科学が果たすべき成果を十二分に感じられる発表であった。二〇〇一年ブリストルの発表に比べると、日本の高校生の落ち着いた態度、わかりやすさ、機知にとんだスピーチを楽しむことができた。英国を代表する学術会議である王立協会会長であり、ケンブリッジトリニティーカレッジの学長でもあるリース卿の高校生への励ましの言葉、英国化学会チーフエクゼグティヴであるパイク教授からそれぞれのプロジェクトへのコメントを頂けたことは、主催者としてこの上ない栄誉である。

英国化学会チーフエクゼクティヴ
パイク教授より修了証書を受け取る

将来展望

ケンブリッジでの初めてのサイエンスワークショップは無事成功裏に終了することができた。今までは日英隔年の開催であったが、二〇一一年については、日英同時開催の準備を進めている。京都では京都教育大附属高等学校を中心として、八月中旬に京都大学で開催される予定である。一方、英国では七月中旬にケンブリッジ大学での開催を予定している。今年同様、本校でのロンドン研修も企画されている。二〇一一年ケンブリッジでのワークショップでは、広く門戸を開き、日本全国の高校へその参加を呼びかけることにしている。

報道

今回のケンブリッジ大学での取り組みは、朝日新聞（九月五日付）で報道され、ケンブリッジ大学、ベイブラハム研究所、ロンドン日本大使館、京都教育大学附属高校、横浜サイエンスフロンティア高等学校のホームページにも紹介されている。

ワークショップに参加して

高二―二　岩渕　将之

あぁ、いつも通りの朝。すこし寝過ごしたみたいだけど、家ではよくある事。あの刺激的で最高なイベントの翌日、心地の良い疲れをまだ体に感じる。ここは自分の部屋、隣には幸せそうに眠っている紳士の国の友達はいないし、ベッドの横には中身が若干溢れているトランクケースなんて無い。今日はどんな実験をやるのだろう、とか、今日の朝食にはあのヨーグルトは出るだろうか、等を考える必要もないわけだ。何故なら、あのイベントはもう終わってしまったから。もうすこし長くても…と、参加した誰もが思っていることだろう。やっぱり、参加して良かった。

『Smile and the world smile with you? ☺』これが僕の研究グループの題。「笑顔は人を笑顔にする。」そんな誰かの格言みたいな事、本当にあったらそれはそれは素敵じゃないか？笑顔が笑顔を生み、最終的にはその場の皆が笑顔になる。そんなお伽話みたいな事…と思うかもしれない。でも、現実に無いと思ったらそれはハズレ…実際は、ある。Cognitive Neuroscience Analysis Group所属だった僕が言うからには、間違いは無いよ。僕が行った実験は、Faceleader3.0というソフトを使い、映像を通して人の表情を細部まで読み取り、分析するというモノ。被験者には前方に設置されたスクリーンに次々と映し出される人の顔に焦点を合わせてもらう。もちろん、何も考えずに。この実験の結果、『人は表情を無意識に相手に合わせる』という事が解った。つまり先述した「笑顔は人を笑顔にする。」これは証明されたことになる。

サイエンスワークショップ、これには『言語の壁』がつきまとうと思っていた。伝えたいことをうまく英語に訳せず、会話が止まってしまう等の障害だ。確かに、初日の僕はそうだった。誤解を恐れ、ろくに発言しなかったと思う。しかし、このままではマズイ、と二日目からは文法等を気にせずに、とにかく伝えたいことを相手に示すようにした。文ではなく単語だけだったり、時にはジェスチャーで。それからというもの、実験は円滑に進み、気分も相当楽になり、自分自身かなり満足した。『決意は壁を超える』これは今回のイベントで得たもうひとつの答えだ。

サイエンスワークショップで一番印象に残ったのは、英人の友達と腹を抱えて笑いながら互いの拳をコツンとぶつけた事。英国では日常的に行われる行為だとしても、僕は他国の習慣に触れることができたのだと感動した。今回の僕の目標、「同世代の人との国際交流」は果たされたように思える。これほど興味深く貴重で楽しい、一生忘れられない思い出をつくる機会を与えて下さった人々に、深く感謝します。

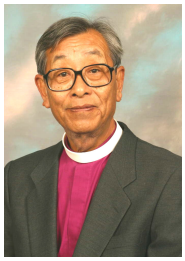
ケンブリッジ・トリニティーカレッジの学長であり、
王立協会会長でもあるリース卿と

ワークショップが掲載されたホームページ

朝日新聞朝刊、教育面で
http://www.asahi.com/edu/news/TKY201009060132.html
京都教育大学附属高等学校
http://www.kyokyo-u.ac.jp/koukou/sshp05/diarypro/diary.cgi?field=19
横浜サイエンスフロンティア高等学校
http://www.city.yokohama.jp/me/kyoiku/sidou2/koukou/sfh/gaiyo/schoollife/inter_prog.html#uk-japan
ロンドン日本大使館
http://www.uk.emb-japan.go.jp/en/event/webmagazine/young_scientist.html
ケンブリッジ大学
http://www.admin.cam.ac.uk/news/dp/2010080401
ベイブラハム研究所
http://www.babraham.ac.uk/news2010/09-aug.html

第３回

チャプレンより



高野主教は立教英国学院の学校付き牧師です。大阪で長く主教をしておられましたが、2003年より本校でチャプレンを務めていらっしゃいます。

日本の美しさと深さ

高野　晃一

私は今から四五年前にカンタベリーの神学校で一年学び、三十五年前には北のダラムに近い教会で二年働き、七年前に立教に来ました。これで三度目のイギリス生活です。イギリスでも今では年毎に食材は豊富になっていますが、海外に住むと日本食の美味しさに気付きます。日本では当たり前の食べ物が、何でこんなにも美味しかったのかと思います。前のイギリス生活がロンドンから離れていたこともあって、日本食は全く手に入りませんでした。日本からの来客のお土産「チキンラーメン」を、家族皆で分け合って食べた時の美味しさは今でも忘れられません。

海外で生活をしてみると日本食と同じように、日本の美しさや深さに目が開かれます。最初カンタベリーの神学校に来た時、私は日本語の「旧新約聖書」と斉藤茂吉「万葉秀歌上下」を持って来ました。日本では落ち着いて読めなかった万葉集を、一日に一首ずつ繰り返し読み、日本語の通じないイギリスで日本語の美しさ深さに触れ学びました。

また日本は仏教国ですから、神学校の友達から仏教に就いて度々聞かれましたが、大学で英米文学科出身の私はシェイクスピアやワーズワスは知ってはいても、大乗仏教に就いては全く答えられず大変恥ずかしい思いをしました。それで日本に帰国してからは出来る限り万葉集や大乗仏教の本も読み、その素晴らしさに眼が開かれました。幸い関東と大阪にも住めたので、実際に自分の足で万葉や日本仏教ゆかりの地を訪ね理解と感動を新たにしました。

袈道(ふすまじ)を
引手(ひきで)の山に妹を置き
山路を行けば生けりともなし

妻を亡くし三輪山近くの引手の山(竜王山)に埋葬し、ひとり山路を帰る私は生きている心地も無い、柿本人麻呂の悲痛な和歌です。現在も桜井から天理まで通じる日本最古の街道「山の辺の道」は、万葉の和歌と深く関わっているゆかりの地です。

なにとなく心騒ぎていねられず
あしたは春の初めと思えば

雪深い越後の国上山、五合庵の良寛さんの和歌です。厳しいイギリスの冬から春の気配を感じる季節には、この和歌の心が通じ合う気がします。

第二次世界大戦後日本は封建主義の名のもとに、その長い歴史を通して養い育てて来た素晴らしい伝統を、ほとんど捨て去ってしまったのではないかと思うことがあります。日本を離れて海外から日本を見詰めると、返って日本の美しさ深さを見出せるのではないか。私自身が生徒たちと共に学びながら、今でも毎日新鮮な日本の発見をしています。

立教大学推薦枠拡大
小・中学部入学試験のお知らせ

今年度より立教大学への推薦入学枠が１０名から１５名に増員され、系属校としてより緊密な連携をはかってゆくことになりました。これにより約半数の生徒が推薦で立教大学に進学できます。

また、2011年度小５、中１の入学試験を実施いたします。入学・編入については本校までお問い合わせください。学校見学も随時受け付けております。

メールマガジンご希望の方は下記ホームページの「メールマガジン配信登録」から登録ができます。

www.rikkyo.co.uk

立教英国学院通信を電子配信に切り替えたい方は下記までご連絡下さい。
ご意見、ご感想もこちらへどうぞ。
infodept@rikkyo.w-sussex.sch.uk

編集後記

２学期は本校の一大イベントであるオープンデイで盛り上がり、日英両国の多くの方々に来校して頂きました。また今年から保護者の方々に後夜祭へ出席していただけるようになり、我が子の晴れ舞台を存分に楽しんで頂けたものと思います。他にもロンドンで開催されたJAPAN祭りへのボランティア参加、大英博物館で行われた裏千家業躰先生による講演会へ茶道部が外出し、男女バスケットボール部によるロンドン遠征、ECの授業では地元でフィールドワーク、Woldingham School校との交流など今学期新たに始まったプロジェクトやここだからこそ出来る取り組みが数多く行われました。なかでも夏休み中に行われたケンブリッジ大学を会場に行われたサイエンスワークショップはとても刺激的で、参加した生徒にとって大変貴重な経験になったことでしょう。

学期末の12月にはめずらしく大雪に見舞われ、恒例のエルムブリッジ村でのキャロリングは中止となってしまいました。ですが、雪に包まれて校内でこぢんまりと行われたキャロリングやクリスマス礼拝もまた一段とよいものでした。また来年も実り多き一年としたいものです。新年もまた立教英国学院をよろしくお願い致します。よいお年をお迎え下さい。